開催地名	福岡県大野城市
開催日時	令和７年７月 31 日（木）　14:00 ～　15:30
開催場所	大野城市北コミュニティセンター
語り部	髙橋 健一（宮城県山元町）
参加者	大野城市防災教育コーディネーター　約 50 名
開催経緯	昨今、どこで大規模な災害が起こるか全く予想ができない状況になっており、普段からしっかりと心構えをして備えておくことが重要である。 災害は遭ってみないとわからないので実際に災害を経験した人の話を聞くことが一番の防災である。
内容	東日本大震災 避難所運営の実際～旧山元町立山下中学校の場合～ （１）東日本大震災時の状況 山下中学校では、その日は卒業式が行われ、教職員が帰宅しようとしていた矢先に地震が発生。山下中学校は指定避難所だったため避難者が続々と訪れたが、台地にあったため津波が見えず、状況がわからないまま対応に追われた。 山元町の人的被害は死者 637 人、家屋被害は全壊 2,217 棟と大規模半壊 534 棟、津波浸水区域は浸水範囲面積 24k ㎡だった。 また近隣の中浜小学校では防災マニュアルにはない屋根への垂直避難をとったことで 90 名全員が助かった。これは学校長の判断だった。 （２）避難所での生活 １日目は状況がわからないままの生活だった。夕方になるとロウソクを使って明かりをつけ、1 台のストーブで暖をとった。布団はもともと支給されていたものに加え、近所の方にもらう等で対応した。役場から３名の職員が派遣されて来て、最初は「たった３名だけ」かと嘆いたが、あとから考えると「3 名も来てくれた」だったことに気づいた。 夜には役場の職員さんが発電機を調達してきてくれ、避難者は夜になっても続々と訪れた。避難者の心境は『孤独』『家族の安否が気になる』『情報がほしい』『プライバシーがない』というようなものだった。 ２日目になると新聞が届き情報を得ることができた。また体育館ではなく教室を開放し避難者の生活場所とした。避難者には好きな部屋に入ってもらうことで知り合い同士が集まりコミュニティができた。そして一階は高齢者など階段が使えない人に使ってもらった。食事は農家さんから野菜をもらい、学校給食調理員さんが調理室で作った。仮設トイレも設置し、水はプールの水を使った。水は放射性物質の問題がでるまでは中学生が、それ以降は大人が運んだ。 ３日目になると部屋ごとに代表者を決めて打ち合わせ(連絡会)を開催し、避難所でのルールや運営方法を話し合い、本格的な避難所運営が始まった。 ここでは避難者が自分たちで作ったルールをもとに行動をした。 配食時、避難者には事前に食事は全員に配布することを知らせることで配食時のパニックを防いだ。また食事は余るくらい作り、帰りが遅い人や翌朝早く出勤する人の朝食、保育所へ持って行くお弁当も準備した。 運動面ではラジオ体操や掃除ボランティアなどを行って体を動かしたり、環境衛生面ではインフルエンザ感染者を個室に移動させたり、自衛官医師や保健師の日赤派遣によりインフルエンザ対策指導があったりし、後に自衛隊の診療所もできた。また次第に仮設浴場で体を温めることができるようにもなった。 車上荒らしやガソリン泥棒がでてきたため自警団を発足し、教室にも必ず誰かが常駐するというルールを作った。

	（３）避難所運営で大切なこと 当時は自主防災組織も未熟で、役場職員も来たが、学校職員で避難所運営を行った。 先生方が率先して運営に当たり、3 日目に立ち上げた避難者代表による連絡会を立ち上げ、徐々に教員から避難者自身で運営できるようにアドバイスをしながら運営母体が避難者となるように移行させてきた。 今後は、避難所運営の成功には早い段階での避難所運営委員会の立ち上げと多様な視点を 持った組織づくりが重要で、平時のうちに訓練や方針を決めておくことが大切である。 山下中学校の避難所運営は外部ボランティアを運営に入れず避難者による運営を必須とした成功した事例である。また避難所のレイアウトは総務省のガイドラインのようにうまくはいかないので、避難者の生活スペースを体育館ではなく教室(小集団)にしたのも成功だったと言えるだろう。 万一大きな災害があり、学校が避難所となる場合では、子どもたちの安全確認・確保と同時並行に、避難所運営を表に出てスタートさせ、徐々に地区役員(自主防災組織)に引き継いでいくことが最善だと思っています。 そのためには、普段から学校(教員)が地域の一員であることを意識し、地域活動に参加し、学校と地域が一緒に取り組んでいくことで、地域全体の防災力向上となります。
開催地より	東日本大震災当時の旧山元町立山下中学校での避難所運営の実際について、非常に具体的かつリアルな体験をもとに語られており、大変印象に残った。 震災当日は卒業式直後で、突然の避難者受け入れに現場が混乱する様子や、情報が得られない中での対応は、災害時の初動の難しさを改めて実感させられた。ま た、教室を避難スペースとし、知り合い同士で生活できる環境を整えたことで自然にコミュニティが形成されたという点や、避難者自らが運営に携わる仕組みをつくった点は、今後の避難所運営の重要な参考になると感じた。 災害はいつどこで起こるかわからないが、平時からの訓練や想定、そして「人を信じて任せる姿勢」の大切さを学ぶことができた。

	実体験に基づいた講演だからこそ説得力があり、参加者からも「大変分かりやすく、これまで学んできた防災知識をよりイメージすることができた」との意見もあり、有意義な時間であった。今後もこうした知見を活かして地域防災に役立てていきたい。